

「変化」が求められる時代を守るべきもの 春季宗教運動・大学キリスト教週間への招き

嶺 重 淑

最近とみに「変化」という言葉を耳にするようになった。今年1月に行われたアメリカ大統領選挙で、“CHANGE”(変化！)を訴えたバラク・フセイン・オバマが当選し、黒人として初めてホワイトハウス入りを果たしたことは記憶に新しいが、それにしても、最近では日本の社会全体が「変化」を肯定し、あらゆる人に「変化」するように求めているようにさえ思える。実際、日本人は概して変化を好み、古いものを大事にするよりは、時代の風潮や流行に追随し、どんどん新しいものを取り入れていこうとする傾向が強いといわれる。もちろん、百年に一度といわれるこの経済不況のなかで、この閉塞感を打ち破るためにも何らかの方策なり変化が求められるのは当然であろうし、改善すべき点はどんどん改善すべきであろう。しかし、その一方で、長期的な視野に立つことなく、とにかく変えればいいのだというような風潮があるとすれば、それはそれで問題だろう。

今年、関西学院は創立120周年を迎えるが、この学院がその120年の歩みのなかで、時代の流れとともに様々な意味で大きな変化を遂げてきたことは想像に難くない。そして今現在、関西学院は大きな変化の渦のなかにある。昨年度は初等部と人間福祉学部が開設され、この4月には聖と大学と合併、教育学部開設、さらに来年は国際学部開設と千里国際学園との合併が予定されており、120年の歴史のなかでも、このような急激な変化を伴う激動の時代はなかったであろう。

確かに「変化」は必要であり、変化を避けていては前進することはできない。その意味でも、時代遅れの旧弊に固執するのではなく、時代に即した新しい道を常に追い求めていくべきである。しかしその一方で、この学院には、120年間変わることなく脈々と受け継がれてきた貴重な財産(建学の精神)があることも事実であり、この財産はこれからも守り続けていかなばならない。

今年も春の大学キリスト教週間の季節を迎えようとしている。この機会に、改めて関西学院の原点に立ち返り、120年経った今でも変わることなく受け継がれてきている目に見えない財産について思いを深めてみたい。

(人間福祉学部准教授・宗教主事)